



<p>保護者・地域の願い</p> <p>□我が子が毎日楽しく学校に通い、いじめ等の問題がなく、一人ひとりが大切にされ、放課後安全に帰宅してくること</p> <p>□地域の中の学校として、自ら進んで挨拶ができる等、地域を明るくすることで貢献する生徒を育成すること</p>	<p>ミッション（社会的使命・存在価値）</p> <p>～に対して（貢献対象）～することで（貢献方法）～する（貢献内容）</p> <p>（今後の人口減少・少子化社会における地域コミュニティの一員として）</p> <p>富勢中は、在籍するすべての生徒及び保護者、地域の住民に対して、特色ある質の高い教育を創造し、その信頼に正面から応えることで、平和で民主的な国家や富勢地域の未来を担う社会の形成者を育てる。</p>	<p>生徒の実態</p> <p>■規範意識の欠如等による生徒指導上の問題を抱える生徒は少ないが、長期欠席の傾向の生徒がいる。</p> <p>■自己肯定感の低い生徒。one of them の意識から only one の意識へ変革する必要。任されたり与えられたりしたことはやるが、自ら考える場面が少ない。</p>
	<p>学校教育目標（長期目標）</p> <p>知性（創造力）・道徳性（想像力）・人間性（生きる力）</p> <p>「生きる力」のある生徒の育成</p> <p>～確かな学力・豊かな心・健やかな体～</p>	

	「 学び続ける 富勢中学校(生徒及び教員)」の 主力商品 として質の高い授業を展開する ➡ 何ができるようになるのか・何を学ぶのか・どのように学ぶのか・何が身についたのか		
中期目標	目指す生徒像 素直(今の自分を大切にしく肯定的自己理解)、将来の自分に期待する(自己有用感) 生徒に身に付けさせたい学力<3つの思考力> 1 論理的思考力 2 創造的思考力 3 想像的思考力		
	1 論理的思考力 ○授業の中で「聞く」「読む」「話す」「書く」等の言語活動を行うことを通して、相手に説明できるロジック(論理性)を身につけている生徒	2 創造的思考力 ○素直で「知性(答えのない問いを深く問い続ける能力)」に溢れ、目の前の問題を解決するための「問い」を自ら立て、他に貢献する生徒	3 想像的思考力 ○授業のめあてに対し、自分の考えを持つ、他と交流し自分の考えをブラッシュアップ(深化・変容)させていく意識(自己肯定感)が高い生徒
短期目標	品質保証 自ら学び続ける生徒の育成に向け、 学び続ける教員としての専門性の向上及び学びの質的変換 を図る	品質改良 教師の説明を受けて理解する知識伝達型から 仲間との交流を核とした問題解決型授業 への移行を図る	商品開発 3年前に創設された 道徳科 の授業を通して、 自ら考え、判断し行動する(学びに向かう力) を育成する
	目指す教員像 学びの共同体(平等に発言するが強制はせず、連帯感はあるが自分自身で考えることを重要視する) 授業を3つの視点で常に見直す(品質保証、品質改良、商品開発)		
	○組織体としての「学びの共同体」を形成し、その協働性を大切にして、お互いに授業づくりに取り組む同僚性が豊かな教員集団	○従来の「この子はよく知っている」から、「この子はよく考えている」を最大級の褒め言葉にすべく授業に対話を仕組む教員集団	○「主体的・対話的な深い学び」のイメージを持ち、カリキュラムマネジメントの視点から単元の構成ができる教員集団
R04 取り組みのための仮説	○全教員が生徒の学びの視点を強調した指導案を作成した上での授業研究を1回以上行い、 リフレクションではどの生徒にどんな学びがどの場面であったかの視点で話し合うことにより 、教員が本時で身につけさせたい力(授業のゴール)と生徒の実態(興味関心や能力の違い)が一般的には乖離していることを認識し、 授業はまとめから逆算して学習問題を設定できるだろう。	○生徒の学びの視点の指導案(見いだす、調べる、深める、まとめあげる)を通し、 概念的知識や意味理解を問う授業を目指すワークショップを行うことにより 、知識基盤社会では知識自体の価値はむしろ下がる中で、最も求められる資質能力の一つが、自分なりの「問いを立てること」であり、「考える」に関して、「どう考えるのか」まで掘り下げることができるだろう。	○講師を招聘してグループワークを入れながら、多様な価値観を前提としてどのように「 考え議論する道徳 」を捉えるか(構成や順序はどう変わるのか)及び評価に関し、資料の提示や所見のための記録方法等の研修を行うことにより、それを応用してビブリオバトルをアレンジし、 同じ本を読んだ後の印象深かったことを語りあう「読書会」 につなげられるだろう。
R04 具体的な取り組み	一番重要な経営資源である「人材(人財)」を育てその能力開発を図る。初任者及び経験2校目の教員を育てることを目指し、 主任等のミドルリーダーが若手研修において、自己の失敗談を語る機会を設けるなど、メンターとなり、お互いに心を開いて語り合う。 一人ひとりの経験・能力・特性(強みと弱み)の把握に努め、認めることを通じて、 本人自身に気付きを与えることを校長が目標申告面接の他、常に実践していく(成長の記録を残す)。	学力を「学んだ結果」としてだけでなく、「学び続ける力」としてとらえた授業へと変わりつつある。 生徒どうしの「関わりあう力」や新しい課題へ「挑戦する力」を育成するための言葉かけをロールプレイングで学ぶ。知識基盤社会は刻々とあらゆる知識がアップデートされ、「本物」と「偽物」の区別が大人でさえ難しくなっている。校長として生徒に「 本物を見抜ける目をもつには、自分が本物の人間になるしかない 」と語っていく。	伝統である密着した生徒指導を基盤としつつ、計画的な道徳の実施する。 善悪等の道徳的判断力、思いやり等の心情、挨拶等の実践意欲は、「想像力」が必須であり、教育活動全体を通した実施計画を策定する。 「生きる」とは「自主的に判断しどう行動するかを決める(行動決定)こと」であり、道徳の時間の発問が心情を問うものが多く、「 他にどのような行動があるか」「あなたならどうするか 」を問うことを全クラスで行う。
R05 に向けて 次の一手	アフターコロナの時代に求められる学校の在り方について、全職員でディスカッションをし、出来ることから始める。柏市の GIGA スクール構想のもと「1人1台端末を活用した授業改善」「情報活用能力の育成」等に全教科で取組む。学校運営協議会(コミュニティスクール)の理念に基づく「 地域学校協働本部 」を実働し、子どもの学びを深める。 地域や保護者に教科・道徳・総合学習・学校行事等を年数回公開するには、どのような対策が必要かを模索していく。 全学年の教科書使用を想定した「 考え議論する道徳 」にするための毎時間の「主発問一覧」暫定版を作成する。I-check テストを実施し、人間関係を数値化・図式化を図ったデータを話し合い等のグループ分に活用する。		